

## 「黒船かわら版」の情報

富澤達三  
TOMIZAWA Tatsuzo  
(COE 研究員・PD)

はじめに

幕末維新时期には、違反出版物であるかわら版<sup>(1)</sup>が大量に出版された。「かわら版」という語は、近代になって定着した語であり、江戸時代は「読売」<sup>(2)</sup>「摺物」などと呼ばれていた。かわら版の嚆矢は大坂夏の陣を描いたものであるともいわれるが、その信憑性は近年疑問視<sup>(3)</sup>されている。巨大都市である江戸は火災が頻発し、そのたびに被災状況などを記したかわら版が出された。古いものとしては、江戸での目黒行人坂の火事（明和9=1772）に関するかわら版が知られる。時代が下るにつれ、かわら版の出版量は増加の一途をたどったようで、題材も敵討・心中・化物の出現・奇形児や多産児出生といった珍事奇談など、多種多様になっていった<sup>(4)</sup>。

かわら版になる事件はニュースバリューの高いものであったが、怪物出現のような虚報もあった。いわば「嘘を楽しむ」ものであり、娯楽的な要素が強いものである。現代のスポーツ新聞でも明らかなウソを面白おかしく書いた記事があって、人々の好奇心の充足に大いに貢献しているから、珍事奇談もののかわら版出版も、江戸時代には商売として成り立っていたのであろう。これらさまざまな種類のかわら版を明確な基準で分類した例は少ない<sup>(5)</sup>。無検閲で年代特定が難しいことなど、歴史資料として使用するための困難さがあるものの、かわら版は江戸庶民社会の動向を示す興味深い図像・文字資料である。

時節めいた噂ごとを出版物とし売りさばくことは、幕府により厳禁とされ、貞享元年（1684）には禁令が出されている。それにもかかわらず、江戸ではしばしば出版されていたようである。かわら版は無検閲の出版物であるから、政治を諷した際どい内容のものが多

いと一般的には考えられがちであるが、権力者の怒りを買う体制批判などのモノは少ない。製作者側にとってかわら版は、売りさばいて利益を上げるための商品であって、捕まる恐れのある題材は避けられたのであろう。

かわら版研究家の中山榮之助氏は、かわら版の定義として「①ニュース性を持つ ②有料である ③即製に摺られた ④無届である」と指摘し、これらはかわら版の特徴としてしばしば引用されている。これらに加え、「版形の多様さ」「紙質の悪さ」という点も特徴として指摘できると考えられる。江戸時代末期になると、錦絵なみに手の込んだかわら版もあったが、ほとんどのものは粗末な作りで、読んで一時の楽しみを得たあとは、大切に保存されることは少なく、捨てられたと推測される。

すでに述べたように、時節めいた噂ごとを出版物にして不特定多数の人々に売りさばくことは禁じられていた。しかしながら幕末期になると、物の本・軟派本を問わず、莫大な量の出版物が出され、幕府の検閲も行きとどかなくなっていた。こうしてかわら版の出版は日常化し、摘発されても罰金程度で許されたようである。

### I 災害かわら版の盛り上がり

弘化～嘉永期になると、善光寺地震や安政東海地震・南海地震など広範囲に及ぶ災害が起り、災害もののかわら版が数多く残されたことが知られる。

「災害もの」はかわら版のなかでも、一大ジャンルであり、図像と漢字仮名まじり文章で構成された画面で、災害発生に関するニュースが伝えられた。たとえば火事を伝えたかわら版であれば、略地図に類焼場所が描かれ、被害の状況が文章で描かれる。絵は拙く・

類焼箇所や被害状況を伝えた文章情報も、現代の新聞と比較すれば、正確さを欠いていたと推定されよう。だが、かわら版では「情報の正確さ」だけが求められたのであろうか。

かわら版は即製に作られた無検閲の商品であり、情報の正確さが保証された出版物ではない。しかしながら、何がしかの真実を含んでいたメディアであった。例えば、火災を扱ったかわら版(図1)ならば「火事の発生」という間違いのない事実がまず最初になければ、そのかわら版は全くの虚報になってしまう。火事が確かに起こったという事実、発生場所・発生日時などといった、情報の根幹部分が伝わればかわら版の商品的価値は保たれたはずである。地震についても同様で、現代とは比べ物にならない貧弱な取材網の下では、正確かつ詳細な情報は望めず、「いつどこで、どの程度の大きさの地震が起こったのか」という揺るぎない事実をいち早く伝えることが、最も重視されたといえよう。虚報や著しく誇張歪曲された事実を、そうと知りつつ楽しむ珍事奇談もののかわら版に比べ、災害もののかわら版は「全くのウソ」を書いていたのではなかったし、大量の文字情報で被害地と被害状況が記され、それらを一覧できる図像が描かれたことは、事実と迫ろうと工夫された印刷物であったと判断できる。災害かわら版は、不正確な情報で事実を伝えたメディアであったといえよう。

このような不正確な情報で事実を伝えた災害かわら版を、情報を求める人々は、口づての情報や複数のかわら版を購入することなどで、不確かな情報を補ったと推測される。江戸などの大都市では、弘化から嘉永期に災害ものを中心として、かわら版の出版が増大したことで、かわら版という信用度の低い情報源から、事実を読み取る方法が必要になっていたと考えられよう。

ところで、かわら版の収集と研究は、中山榮之輔氏・山名隆三氏など、おもに民間のコレクターによって行なわれてきた。1990年代になり、東京大学史料編纂所により、日本各地に残された風説留内の図像資料(手描きおよび摺物)の悉皆調査とデータベース化が行なわれ、東京大学社会情報研究所(現、東京大学大学院情報学環)図書室の所蔵する小野秀雄コレクション

のかわら版・新聞錦絵の展示、全文解読・デジタルデータベース<sup>(7)</sup>も行なわれた。近年のIT社会の到来により、錦絵・絵図などの画像資料の解析は、技術的に可能となっており、かわら版(摺物)研究は、大量の一次史料を比較検討して庶民社会で果たした情報機能を具体的に記述する、新たな段階に入ったといえる。

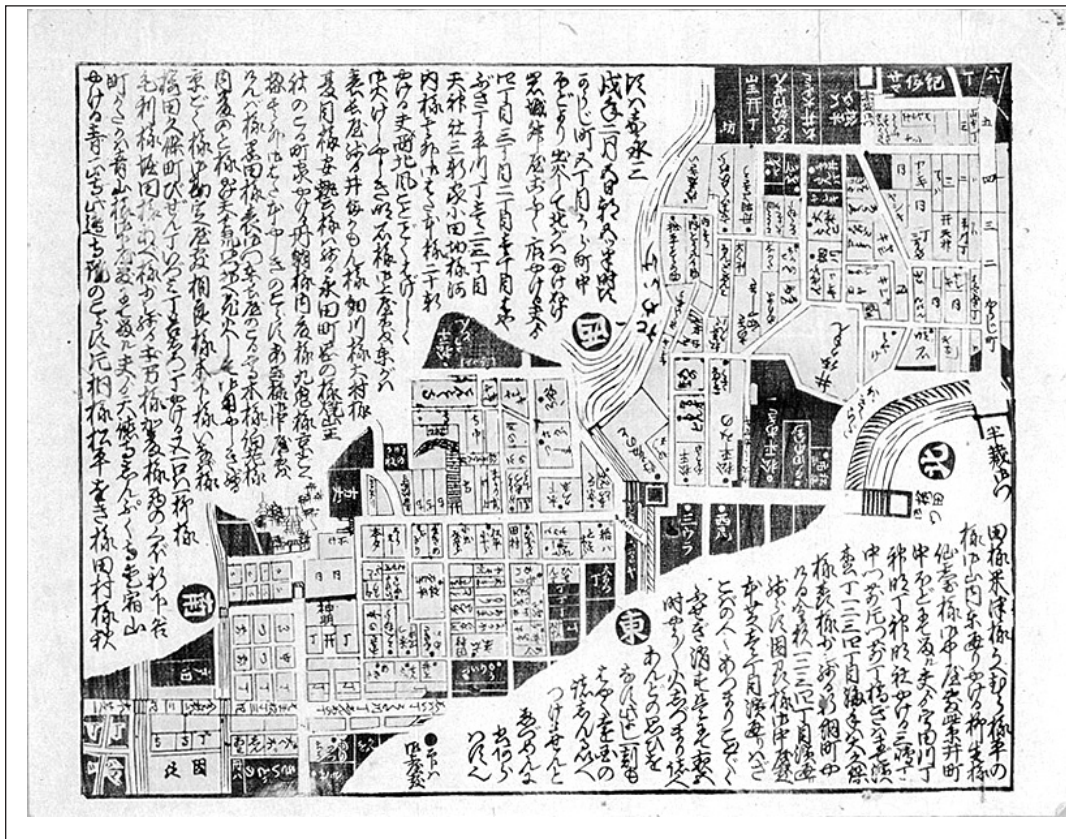
## II 黒船かわら版について

大事件に対応して出版ブームが起きることは、歴史上しばしば見られ、その社会的な意義を考察した研究も多い<sup>(8)</sup>。そこに描かれた事件を解読することで、庶民の意識に迫るとともに、当時の情報のあり方と情報ネットワークの実態に迫ることができる。本節では黒船かわら版の先行研究を踏まえ、黒船かわら版の情動的機能に関して新たな観点を提示したい。

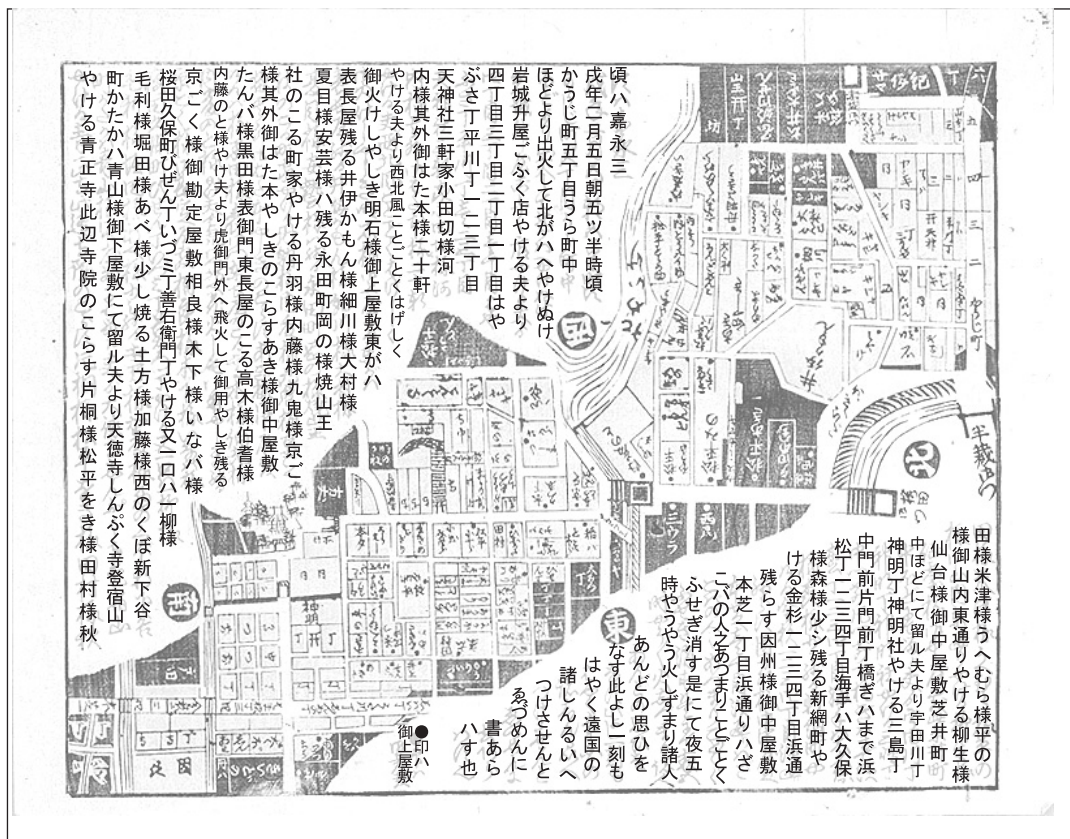
多種多様なかわら版のなかでも、幕末期における異国船の日本接近を題材とする「黒船もの」(以下「黒船かわら版」と総称する)は一大ジャンルを成している。特に嘉永6年(1853)6月のペリー来航と翌7年1月の再来航は幕府に衝撃を与えた。そして支配階級のみならず、名主層・一般の庶民にも一大事として受け止められ、関連する情報が積極的に収集されたことが知られる<sup>(9)</sup>。

ペリーと外交使節の上陸・通商条約の締結といった、一連の事件を題材とするかわら版は、膨大な点数が制作され、その全貌は未だ明らかではない。マリオン・ウィリアム・スティール氏は、江戸市中では1853-54年にかけての黒船かわら版の出版状況を「およそ五〇〇種類を越え」「最小限に見積もってもおおよそ一〇〇万部が刷られた<sup>(10)</sup>」と推測する。スティール氏は黒船かわら版を「①外国やその風物を紹介するもの(黒船・外国の風俗・ペリーや外国人の肖像・献上品を描く)」「②幕府と諸藩の黒船来航への対抗策を描いたもの(御固・攘夷思想を描く)」「③政治風刺(幕府批判を描く)と3つのパターンに分類する<sup>(11)</sup>。このように、数多く残る黒船かわら版をいくつかの類型に分けて分析することは、庶民にとっての「黒船来航」の意味を問う有効な方法となろう。このほかに、横浜開港資料館<sup>(12)</sup>では、同館の所蔵する黒船かわら版の目録を出版するとともに、ペリー来航が日本社会へ与えた衝撃と、地

図1 火事の情報伝えるかわら版



『江戸麹町辺大火（仮）』 315×405mm 嘉永3年（1850）  
（東京大学大学院情報学環図書蔵）



域社会へ及ぼした影響について個別具体的に迫っている。<sup>(13)</sup>

さて、斎藤多喜夫氏は黒船かわら版を、おおよそ以下のように分類する。

- ①黒船、②御固、③ペリーとその一行、④応接風景、⑤献上品・答礼品、⑥風刺

これらの分類をみると、黒船かわら版はペリー来航事件に関する、一連の経過に対応して出版されていたとも考えられる。つまり、かわら版の出版は「黒船の接近」→「(黒船接近に対処する)御固」→「ペリー一行の上陸」→「一行への応接」→「献上品・答礼品(の授受)」→「通商条約の締結」→「(黒船来航事件への)風刺」といった、ペリー来航から数年間にわたる事件の推移を継続的に伝えていったと推測できる。そして、版の画像や文字情報を追加変更することで状況変化に対応したこともあったはずである。本節では、ペリー来航事件を最も象徴的に示すと考えられる、「黒船」を描いたかわら版(前出①の分類)を例に、黒船かわら版の果たした情報機能の一端を考察してみたい。

黒船かわら版に描かれた外国船(黒船)イメージの出自については、斎藤多喜夫氏の詳細な考察がある。<sup>(14)</sup> 斎藤氏によると、従来あった異国人や異国船のイメージを剽窃したものが多くという。管見の限りでは、黒船を描いたかわら版の多くは典型的であり、専門の絵師が描いたものとは考えにくい。しかし、当時は識字率が低かったことから、多くの庶民が画像情報によって、事件の情報をおぼろげながらも得たと考えられる。本稿では12点の黒船を描いたかわら版を事例とする(表1)。すでに述べたように、黒船かわら版はペリー来航事件の推移を、時系列に沿って伝えたとみられる。画像が似た作品を複数考察することで、違反出版物のかわら版が伝えた情報の内容が明らかになり、同時にそれを受容した庶民の情報行動の一端も見えてくると考えられる。

黒船に共通する画像は、まず画面中央部分に船の全体像を描き、黒色の船体、三本の巨大なマスト、アメリカ国旗、推進用の外輪と白煙を噴く蒸気機関の煙突などが殆どの画像で共通している(図2)。その周囲には小船、船上には乗員が描かれ、それらとの対比か

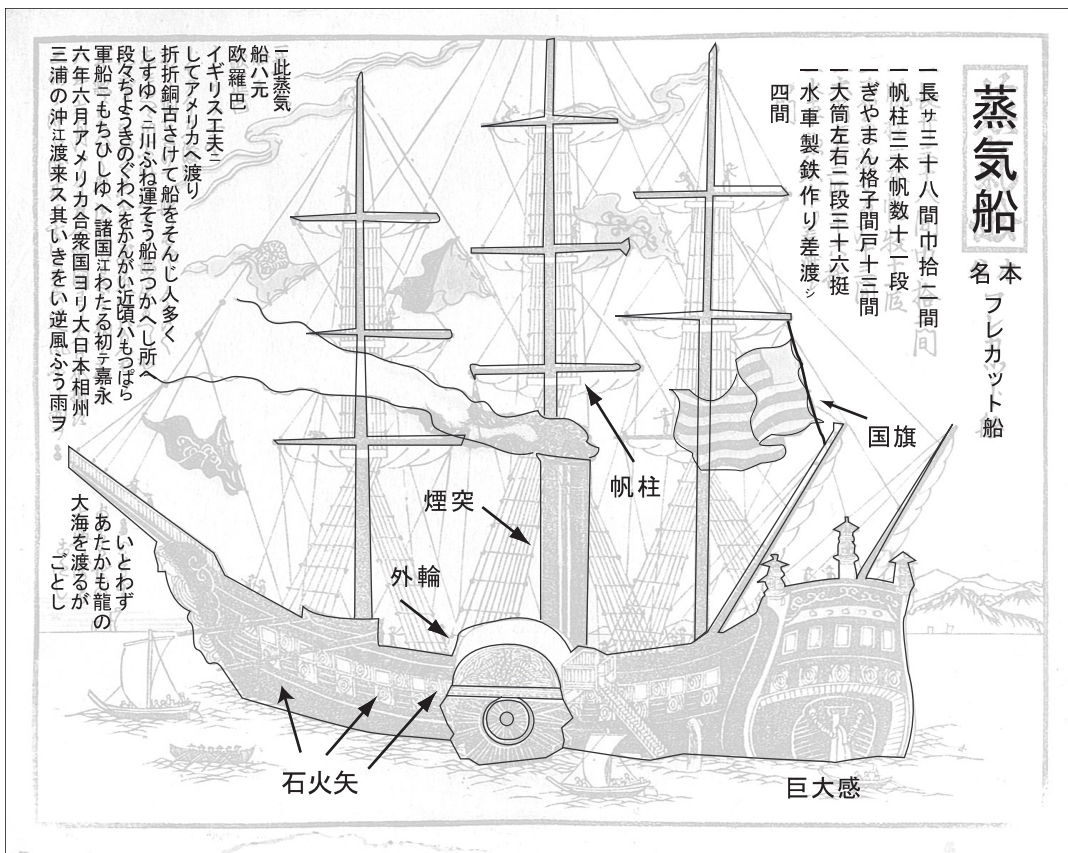
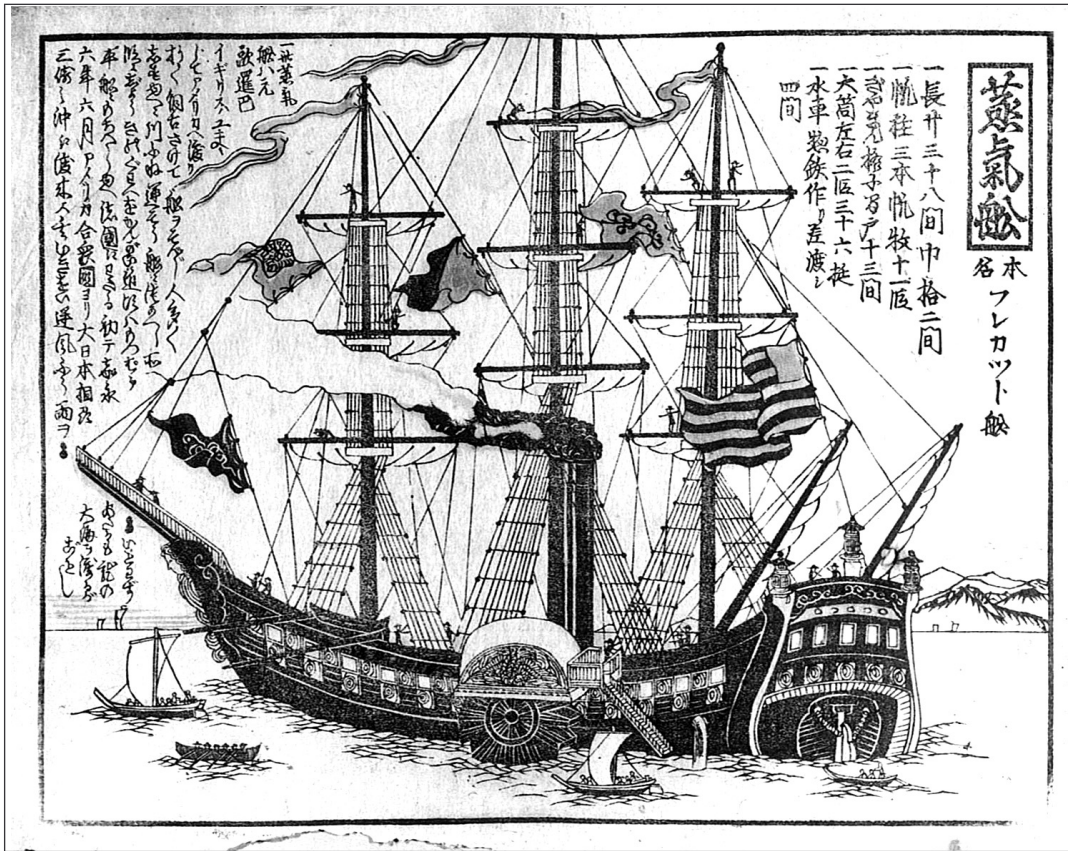
ら船体の大きさが強調されている。

画像情報を補う文字情報としては、「全長」「中」「帆柱の数」「船員数」「石火矢(大砲)の数」「外輪の直径」などの情報が書かれる。蒸気船の驚異的な速度に関しては「あたかも龍の大海を渡るがごとし」(図2『蒸気船 本名フレカット船』)としている。また、御固に関する情報を載せたもの(No.1・2)も見られる。異国船接近に対する防備の様子を伝えることは、幕府がこの非常事態に対して無策ではなかったことを知らしめる一種の「御用報道」であろう。かわら版業者は、幕府に有利な情報を載せることで、違反出版を大目にみてもらう、したたかな意図があったと推測される。

また、中浜万次郎(ジョン万次郎)帰国に関する情報を載せたものもある(No.9・10)。『蒸気火輪船之図』(No.10)では「天保十一年正月五日土佐之國幡多郡、中濱之獵船万之助外四人、北亞墨利加江漂着ス、十三ヶ年之後ニ至リ嘉永五年長崎表へ帰国ス」とし、No.9でもほぼ同じ文章情報が載っている。実際には、中浜万次郎は天保12年正月5日に遭難、アメリカ船に救助されて同国フェアヘイブンで教育を受けたのちに帰国を決意、嘉永4年正月沖繩に上陸のち、土佐の中ノ濱に戻ったのは嘉永5年10月のことであった。この間、万次郎は嘉永4年の8月に長崎で詰問を受けている。かわら版の情報には、名前・遭難と帰国の年月が違うなどといった誤りが見られる。万次郎の情報がかわら版に載せられたのは、ペリー来航の年である嘉永6年11月に、アメリカでの知識を買われた万次郎が、幕府に召されたことに関係していると推定される。したがって、No.9・10のかわら版は嘉永6年11月以降の作品とも考えられよう。このほかに「アメリカ」の国名が記載され、黒船の出身国がわかるもの(No.1・8・11・12)もある。また、黒船の出現地を浦賀であると示したものは少ない(No.12)。

以上のように、典型的な黒船の画像や正確さを欠いた文章の情報からは、異国船来航事件の概要が知られるに過ぎない。しかし「黒色の巨大船が浦賀に来航した」「船はアメリカ国から来た」「蒸気で動く船である」「マストが三本もある」といった情報の根幹部分は、いくつかのかわら版を見ることでわかってくる(図3)。

図2 「蒸気船 本名フレカット船」 [嘉永6.6.3] (245×335mm 横浜開港資料館蔵)

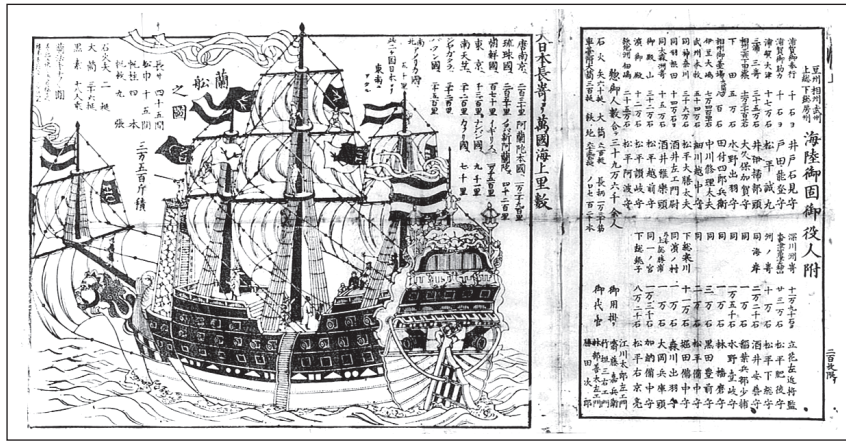


国籍・色・巨大さ・武装（大砲）・帆柱の数・動力など、黒船に関する根幹の情報が不正確ながらも、盛り込まれている。

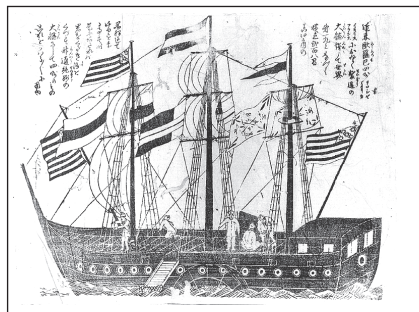
図3 「黒船」を描いたかわら版（全12例）



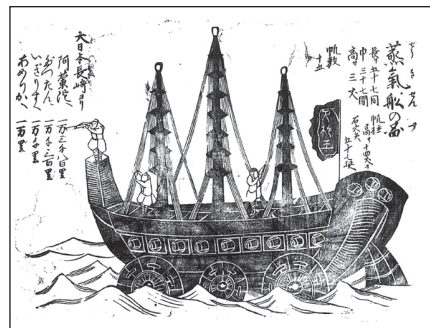
1、豆州相州武州上総下総房州海陸御固御役人附・[蒸気船図]・異国行烈之図 (317×600 [単位はmm、以下同様])



2、豆州相州武州上総下総房州海陸御固御役人附・蘭船之図 (318×615)

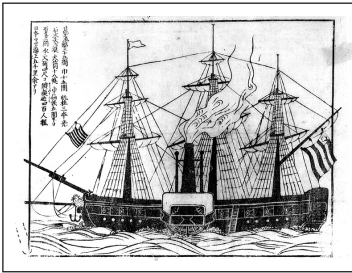


3、[北アメリカ蒸気船] (224×303)

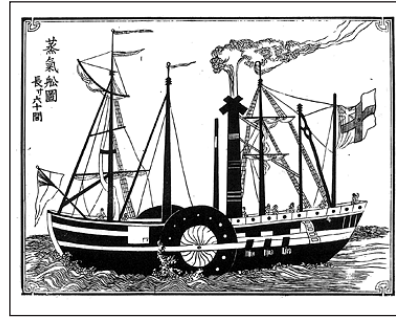


4、蒸気船の図 (260×320)

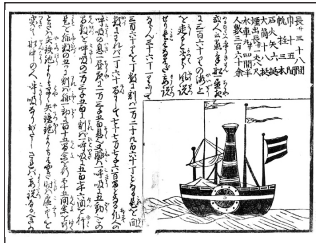
10cm



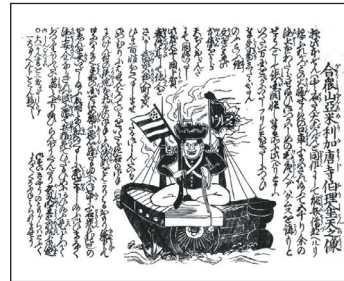
5、[蒸気船図 長サ三十五間  
巾十五間 帆柱三本] (196×257)



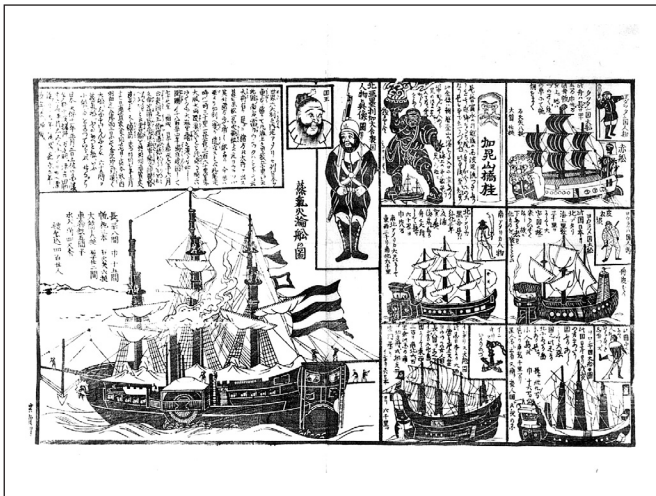
7、蒸気船図 長サ六十間 (229×284)  
→裏面に、嘉永6年6月に長崎表に来た船、とある。



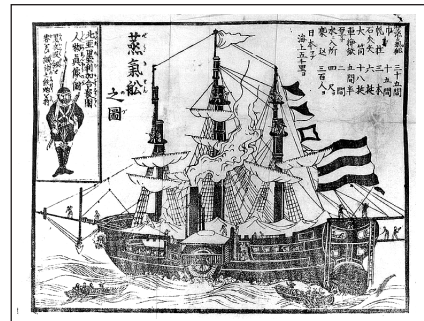
6、[蒸気船図 長サ三十八間  
巾十五間 帆柱三本] (177×230)



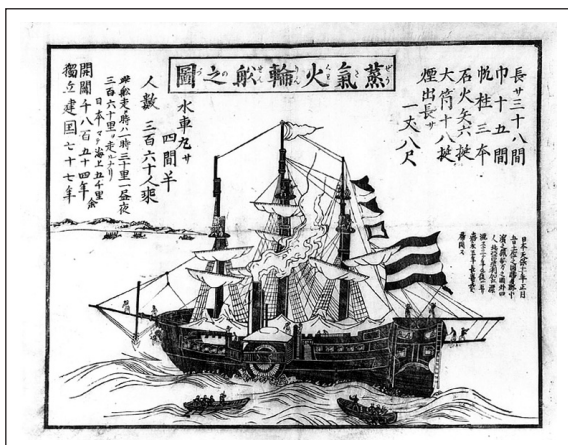
8、合衆山亜米利加唐寺伯里璽天の像  
(203×248)



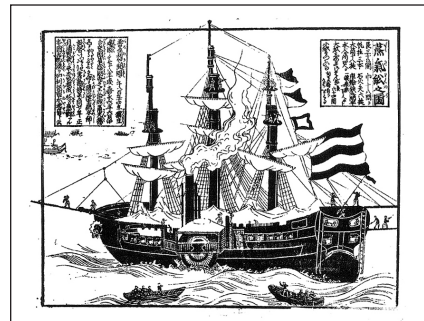
9、蒸気火輪船の図 (360×480)



11、蒸気船之図 (234×306)



10、蒸気火輪船之図 (321×415)



12、蒸気船之図 (235×305)

表1 「黒船」を描いたかわら版

順番	発行年(推定)	西暦	題名	大きさ, 形態など	番号
1	[嘉永 6. 6. 7]	1853	豆州相州武州上総下総房州海陸御固御役人附・ [蒸気船図]・異国行烈之図	317×600, 一枚刷	K 12
2	[嘉永 6. 6. 7]	1853	豆州相州武州上総下総房州海陸御固御役人附・蘭 船之図	318×615, 一枚刷	K 14
3	[嘉永 6. 6. 12]	1853	[北アメリカ蒸気船]	224×303, 一枚刷	K 23
4	[嘉永 6. 6]	1853	蒸気船の図	260×320, 一枚刷	K 26
5	[嘉永 6. 6]	1853	[蒸気船図 長サ三十五間 巾十五間 帆柱三本]	196×257, 一枚刷	K 28
6	[嘉永 6. 6]	1853	[蒸気船図 長サ三十八間 巾十五間 帆柱三本]	177×230, 一枚刷	K 29
7	[嘉永 6. 6] (裏 面墨書)	1853	蒸気船図 長サ六十間	229×284, 一枚刷, 彩色	K 30
8	[嘉永 6. 6 直後]	1853	合衆山亜米利加唐寺伯里璽天之像	203×248, 一枚刷	K 36
9	[安政 1. 2]	1854	蒸気火輪船の図	360×480, 一枚刷	K 75
10	[安政 1. 2]	1854	蒸気火輪船之図	321×415, 一枚刷	K 107
11	[安政 1. 2]	1854	蒸気船之図	234×306, 一枚刷	K 112
12	[安政 1. 2]	1854	蒸気船之図	235×305, 一枚刷	K 113

『横浜開港資料館所蔵 瓦版・浮世絵目録(平成 8 年 12 月末現在)』(横浜開港資料館, 1997)より作成。[ ]は仮題

先にも述べたとおり, かわら版は類型的図像と不正確な文章情報で事実を想起させるところに特色があった。つまり, かわら版では, 購入者がひと目見て, 火事・地震・敵討ち・化け物出現などの事件であると理解し得る図像と, いい加減ではあるものの, 幾ばくかの事実を含んだ文字情報から, 確定的な事実を連想させる手法がとられているのである。ペリー来航という大事件に際しても, 大量のかわら版情報が氾濫するなか, 江戸の人々は不正確な情報を取捨選択し, 口づての情報などで, より正確な情報に近づいていったと考えられる。

岩下哲典氏はペリー来航後, 「幕末情報社会」とも呼ぶような状況が出現したとし, 「浦賀の黒船」「ペロり」「あめりかさま」などのペリー一行に関する情報が, 多くの庶民の共通のコードとなり, これらを介して「これまで一対一, あるいは一対多の対応が普通であった情報伝達は, 多対一, あるいは, 多対多の, 複雑で多様な情報伝達に変容することを余儀なくされた<sup>(15)</sup>」とした。黒船来航に先立つ災害かわら版のブームで, 庶民は「不正確な情報から, より確かな事実到達する」情報獲得方法を身につけつつあり, 黒船かわら版ブームは不確かな情報源からの事実の読み取り方法を, より一層進化させたと考えられる。

また, ペリー来航に関するかわら版が頻繁に出され

た頃, 武士の間では「黒船絵巻」が多数作られたことが知られる。本職の絵師によって描かれた逸品もあれば, 絵心のある武士によって描かれたと推測される, やや拙いが味のある描線の作品もある<sup>(16)</sup>。おもに武士階級の間で転写が繰り返されたと推測されている。卷子状の絵画であるため, 少しずつ巻き取りながら見るか, 大きな部屋で広げて全体を見なければならぬため, 一枚ないしは二〜三枚もの多いかわら版と違って, 閲覧は簡単ではない。ペリー来航に関するかわら版の図像には黒船絵巻に描かれたものと似た図像もあり, 武士階級の収集した情報の一部がかわら版に流れた可能性も指摘されているものの, 立証は困難である。武家の間で蒐集された情報の一部が流失し, 庶民のメディアであるかわら版となり, 情報源として大量にばら撒かれたことは, 武士から庶民への, 階級を超えた情報交流の事例として興味深い。今後も図像・文章情報両方の調査が必要であろう。

おわりに

2度にわたるペリー艦隊の来航・和親条約の締結は, 幕末政治史における一大事件であり, 武士階級のみならず庶民にも衝撃をあたえた。しかしながら, 江戸幕府や諸藩は当時の庶民に対し, 公式発表を行なう義務を全く負っていなかった。異国船は何処から, いか



る目的を持ってやって来たのか、などの情報は一切公表されなかったのである。したがって庶民は、非日常的な事件の情報を自ら獲得するしかなかった。

本稿では黒船かわら版のなかでも「黒船」を描いた作品を事例として考察を進めた。黒船を描いたかわら版の情報は、当時の人々にとっても類型的な図像で文章内容も不正確なものであったと考えられる。しかし、かわら版は類型的図像と、不正確でときには戯文的なテキストで情報を伝え、枝葉から幹根部分にある事実へと人々を誘引し、情報の本質を伝達するメディアであった。黒船を描いたかわら版の、稚拙で類型的な黒船の図像・不正確な文章情報からも、「アメリカから黒色の大型船が来た」「蒸気の動力を備えている」「幕府も沿岸防備を行なっている」といった、揺るぎない事実の部分は多くの庶民に伝わったと考えられる。

黒船かわら版は、製作者の間で剽窃や転写が繰り返され、数百種類が作られた。ペリー来航後、莫大な数の曖昧模糊たる情報が江戸と周辺にばら撒かれたのである。しかしながら、かわら版によって到達しうる事実には限界があった。購入者は自らの社会的地位に基づく情報収集網、例えば商人の商品流通ルート、村落名主層による公的ネットワーク<sup>(17)</sup>、中・下級武士層の藩内での情報入手、武家と使用人のあいだでの伝聞など、口頭や書状による事件情報の入手を試み、情報の精度を高めた。なかにはより高度の、政権内部の者しか知りえない情報をつかんだものもいたと推測される。

「事件が起きていること」それ自体が公的権力から伝達されなかった近世社会のなかで、黒船かわら版は、ペリー来航（1853.6月）から横浜開港（1859.6月）後までの長い間、継続的に「ペリー艦隊来航→上陸→歓待→条約締結→横浜開港」など一連の事件を伝え、高い情報的価値をもったと考えられる。政治的情報の出版と販売は、幕府によって堅く禁じられていたが、外交に関わる政治的情報が印刷物となり、膨大な数の庶民に継続的に読み解かれたことは、幕府の出版情報統制政策の弱体化を示すものであろう。

かわら版の不正確な情報から少しでも事実に迫るべく、階層内外での情報獲得行動が活性化し、庶民までもが獲得した情報を分析活用して、次代の政治勢力を形成するというシナリオは、宮地正人氏のいう「公論」<sup>(19)</sup>

<sup>(20)</sup>世界の成立としても理解できる。しかしながら、全ての人々が政治世界に積極的に参加したのではなく、日常生活を維持し、地域社会において平穩に暮らすため、情報を積極的に収集・利用したのではないか。本稿では黒船を描いたかわら版の傾向を分析するとどまっていたが、画像情報と文章情報のより詳細な考察は今後の課題としたい。

## 注

- (1) 「かわら版」という用語の定着については、(町田市立博物館 1984)、(グローマー 1995:70-73)を参照した。
- (2) 近年、火事場附・番附・役人附・引札・大小曆・一枚摺・数枚の綴りや冊子仕立ての出版物・ピラ・チラシなど、墨色の単色摺りか朱や青といった若干色の摺りや手彩色にとどまっているものを、一括して「摺物」と総称することが多くなった。摺物の定義については、東京大学史料編纂所ホームページ「摺物データベース」トップページ、「検索補助」ボタンより入った検索システム支援ページの第一項目「本目録(データベース)の性格」(<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/shipso/suri/HELP/shelp1.html>)に詳しい。著者も今後は「摺物」の語を使っていくつもりであるが、本稿においてはもっともポピュラーな「かわら版」を使用する。
- (3) 大坂の夏の陣のかわら版の真偽については、(北原 2003)第一章で考察されている。
- (4) かわら版の概説については、(中山 1974, 中山編 1974)、1978『かわら版新聞 江戸・明治三百事件 I~IV』に詳しい。
- (5) 東京大学大学院情報学環図書室(旧、社会情報研究所図書室)の所蔵する、小野秀雄コレクションのかわら版に関しては、(北原 2003)第5章を参照されたい。
- (6) かわら版の紙質、版型の多様さについては(富澤 2004)第二章二節を参照のこと。
- (7) 前出、東京大学大学院情報学環図書室所蔵の、小野秀雄コレクションの新聞錦絵・かわら版を使った博物館展示は、「ニュースの誕生 —かわら版と新聞錦絵の情報世界」として、1999年末に東京大学総合研究博物館で行なわれた。同展示の成果は(木下・吉見編 1999)にまとめられている。なお、小野コレクションのかわら版・新聞錦絵のデジタルデータベースは簡易版を東京大学大学院情報学環図書室ホームページ内(<http://www.isics.u-tokyo.ac.jp/db/contents/>)で閲覧できる。また、商品版として(北原・佐藤監修 2000)がある。
- (8) このような試みとして、(土屋 1995)、(南 1997;1998;1999)、(林・青木編 2003)、(富澤 2004)などがある。
- (9) (岩下 2000)第一部四章。
- (10) (スティール 1998:16)。なお黒船かわら版の出版量

と種類に関し、スティール氏がこのような数値を出すに至った、史料の根拠は示されていない。

- (11) (田中校注 1991: 192)
- (12) (横浜開港資料館 1997)
- (13) (横浜開港資料館 2004)
- (14) 黒船かわら版の類型分析については、(斎藤 1986, 2004)
- (15) 前出、(岩下 2000: 149)
- (16) 黒船絵巻に関しては、(大久保監修 1988)
- (17) (岩田 2001) など。
- (18) 武家使用人による情報収集の実態については、(石山 2002) に詳しい。
- (19) 幕末期の地方における情報獲得行動については、(太田 1991, のち保谷編 2001 所収), 前出の(岩田 2001) に詳しい。また近世史における情報研究の動向については(岩田 2000: 111-114), (高部 2002) が詳しい。
- (20) (宮地 1993)。

※本稿作成にあたり、田中葉子氏のご協力を得ました。この場を借りてお礼申し上げます。

## 参考文献

林英夫

1985 『『読売り・瓦版』の世界』『歴史評論』113。

保谷徹編

2001 『幕末維新論集 10 幕末維新と情報』東京：吉川弘文館。

石山秀和

2002 「幕末期における旗本用人の情報入手とその伝達」『洋学研究誌 一滴』第 10 号, 岡山：津山洋学資料館。

岩下哲典

2000 『幕末日本の情報活動——「開国」の情報誌——』東京：雄山閣。

岩田みゆき

2000 「情報ネットワーク社会の胎動」大石学編『江戸時代への接近』101-112, 東京：吉川弘文館。

2001 『幕末の情報と社会変革』東京：吉川弘文館。

ジェラルド・グローマー

1995 『幕末のはやり唄 口説節と都々逸節の新研究』東京：名著出版。

北原糸子

2003 『近世災害情報論』東京：塙書房。

木下直之・吉見俊哉編

1999 『ニュースの誕生 かわら版と新聞錦絵の情報世界』東京：東京大学出版会。

北原糸子・佐藤健二監修

2000 『CD-ROM 小野秀雄コレクション かわら版・新聞錦絵』東京：トランスアート。

町田市立博物館

1986 『展示図録 かわらばん展』東京：町田市立博物館。

マリオン・ウィリアム・スティール

1998 『もう一つの近代 側面からみた幕末明治』東京：ペリカン社。

南和男

1997 『江戸の風刺画』東京：吉川弘文館。

1998 『幕末江戸の文化 浮世絵と風刺画』東京：塙書房。

1999 『幕末維新の風刺画』東京：吉川弘文館。

宮地正人

1993 「風説留からみた幕末社会の特質——『公論』世界の端緒的成立」『思想』第 831 号。

中山榮之輔編

1974 『かわら版集成』東京：柏書房。

中山榮之輔

1974 『江戸明治かわらばん選集』東京：人文社。

大久保利謙監修

1988 『黒船来航譜』東京：毎日新聞。

小野秀雄

1965 『かわら版物語』東京：雄山閣。

太田富康

1991 「ペリー来航期における農民の黒船情報収集—武蔵国川越藩領名主の場合」『埼玉県立文書館紀要』五号, 埼玉：埼玉県立文書館。

斎藤多喜夫

1986 「長崎から来た黒船——開国期瓦版の海外情——」『たまくす』4号, 神奈川：横浜開港資料館。

高部淑子

2002 「日本近世史研究における情報」『歴史評論』No. 630。

田中彰校注

1991 『日本近代思想体系 1 開国』東京：岩波書店。

田中葉子

2001 「かわら版におけるアメリカ人の形体——ペリー来航の捉え方——」『立教日本史論集』第 8 号。

富澤達三

2004 『錦絵のちから 時事的錦絵とかわら版』東京：文生書院。

土屋礼子

1995 『大阪の錦絵新聞』大阪：三元社。

横浜開港資料館

1997 『横浜開港資料館所蔵かわら版・浮世絵目録 (平成 8 年 12 月末現在)』神奈川：横浜開港資料館。

2004 『ペリー来航と横浜』神奈川：横浜開港資料館。

横浜マリタイムミュージアム

2002 『企画展 ペリー来航前後の江戸湾の海防』神奈川：横浜マリタイムミュージアム。

1978 『かわら版新聞 江戸・明治三百事件 I~IV』東京：平凡社。

(2004 年 10 月 15 日受理, 11 月 10 日審査終了)